

授業科目名	平和学	単位数	2
担当教員名	平井 朗	担当形態	単独
実務内容 (実務家教員の場合)			
<p>「学位授与の方針」との関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題が生起する現場において、専門知や統合知を使い、解決のために実践しようとする気概を持つこと。 ・多様な人々や生命に対して、他者を認め、他者を排除せず、仲間を作るという星槎の三つの約束の精神に則って、共生社会の創造に貢献する姿勢を身につけていること。 ・個人や社会にとって必要な課題の解決のため、自律的な課題探究能力を身につけていること。 			
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) さまざまな現象として現れている地球環境や人間社会の存続の危機を「開発主義の暴力」、即ち「平和の問題」として総合的に把握する。さらにこれらの暴力への自分自身の関与を理解する。 (2) 貧富の格差が拡大し、年間 2 万人以上の人びとが自殺することと、水俣病や東電原発事故のような産業公害、環境破壊が同根であることを構造的暴力という視点から捉え直して理解できる。 (3) 生存のための自然環境と社会基盤崩壊の危機をサブシステム（生存基盤）の危機として捉え、それに立ち向かうさまざまな営みを理解し、自らの立ち位置をきちんと捉え直すことができる。 (4) グローバリゼーションはヒト・モノ・カネのボーダーレスな移動だと言われる。しかし実際は利潤を生むカネ・モノ・情報は国境を越えてますます容易に往き来する一方で、選ばれた以外の人間や商品の移動は効果的に遮断されており、その構造が見えないように隠されていることを理解する。 (5) 第三世界と日本社会における危機がグローバル化の中でじつは一体であること、第三世界と未来世代に回されたツケ、その相互の関係性を捉え直すことができる。 (6) さまざまな危機、暴力を克服する実践例から、サブシステム志向の問題対応を理解できる。 (7) 「平和」実現のツールと考えられてきた「開発」や「安全保障」、またそれらに関する今までの研究の限界と課題を、平和学の中に位置づけて理解することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>「平和の反対語は？」と尋ねると多くの場合「戦争」という答が返ってくる。しかしたとえ戦争がなくても栄養失調などで 3 秒に 1 人の子どもが死ぬ世界、「豊かな」電力を支えた筈の原発のために 7 万人近くが故郷に帰れない現在の世界を平和であり、人権が守られているといえるのだろうか。</p> <p>戦争に限らずあらゆる暴力を減らしていくことをめざすのが平和研究であり、平和学である。開発や利益の増大よりも、生命とその生存基盤（サブシステム）を志向する。</p> <p>格差が拡大して人間同士の関係性が破壊され、多様な生命のつながり／生態系としての地球環境が壊されるいま、具体的な現場で暴力をとらえ、それを克服していくことが課題である。</p>			

永続可能な社会をめざす平和学をアジア太平洋地域の現実や NGO などの実践から学び、いま何をしてはならず、何をすべきかを考える。なお、スクーリングでは、平和学の方法であるエクスポージャーを実践するワークショップや相互討論など、アクティブラーニングの手法も用いて実施する。

授業計画

- 第1回：「平和学」の基本概念、暴力の不在としての平和に関して理解する。
- 第2回：「直接的暴力」と「構造的暴力」の発見。暴力を克服する「自力更生」、そして「エンパワメント」を理解する。
- 第3回：公害・環境破壊が「開発主義」の暴力であることを理解する。
- 第4回：自力更生をつなぐ「市民連帯」と「エクスポージャー」によって「サブシステム」を回復し、永続可能な社会へ向かう「サブシステム志向」の平和学を理解する。
- 第5回：「快」を増やす志向から「苦」を減らす志向へと逆転し、開発による暴力を克服するパラダイム転換のための「開発主義」からの脱却（脱開発主義）を理解する。
- 第6回：資本主義経済の「近代世界システム」を理解し、サブシステム志向との関係を捉え直す。
- 第7回：「開発」と「安全保障」の表裏一体の関係を理解し、安全保障を「脱『安全保障』」へと捉え直す。
- 第8回：サブシステムの中核としての「ジェンダー関係」を近代化論と逆方向のサブシステム志向によって捉え直す。
- 第9回：生殖活動もサブシステムの中核に位置する。平和学の視点から「リプロダクティブ・ヘルス／ライツ」をめぐる諸問題を理解する。
- 第10回：「国際協力」という一見非政治的で美しい言葉を平和学の視点から捉え直し、そこに隠された開発主義や国益の暴力を理解する。
- 第11回：フィリピンの農山村の事例から、医療へのアクセス促進を掲げる「市場化の推進」によって人びとの健康格差が拡大し、「サブシステムが剥奪」されていることを理解する。
- 第12回：北アイルランド紛争における宗教者の活動事例を通して、「平和構築」に必要な重要な要素を理解する。
- 第13回：サブシステムの枢要な要素である「コミュニケーション」が暴力克服に果たす役割を理解する。
- 第14回：平和学の方法としてのエクスポージャー：分断から連帯へサブシステムの回復を考える。
- 第15回：自分自身と世界との関係性を洗い直し、平和を再考する。

定期試験

スクーリングでの学修内容

「授業計画」の第1回から第13回までの学習内容について、提示したテキストと参考書を読み、自己学修する。

以上を踏まえた自己学習の成果物をレポートと位置付ける。テーマについては学習指導書を参照。

スクーリングでは、第14回から第15回の内容を中心に、アクティブラーニングの手法によるワークショップ、討論などを行うので、事前の自己学修は必須である。さらにその上に、自

己の現状を相対化した議論ができる方法を習得する。

教科書

(1) 平井 朗・横山 正樹・小山英之 編 (2020) 『平和学のいま—地球・自分・未来をつなぐ見取図』 法律文化社

(2) 法律文化社 教科書関連情報 『平和学のいま』

<https://www.hou-bun.com/01main/ISBN978-4-589-04096-1/index.html>

参考文献

(1) 郭 洋春・戸崎 純・横山 正樹 編 (2004) 『脱「開発」へのサブシステム論』 法律文化社

(2) 郭 洋春・戸崎 純・横山 正樹 編 (2005) 『環境平和学』 法律文化社

(3) C・ダグラス・ラミス (2004) 『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』 平凡社

(4) C・ダグラス・ラミス, 辻 信一 (2008) 『エコとピースの交差点』 大月書店

学生に対する評価

スクーリング評価 (25%)、レポート評価 (25%)、科目修得試験 (50%) を総合して評価する。